

STUDIO KOMA

Vol.2

The Mailgraph of Monthly Publication

2000.NOV.30

PHOTOGRAPHS WITH TEXT
TATSUANG / TATSUYA ATARASHI

© 2000 Tatsuya Atarashi

TATSUANG

初冬富士



11月中旬、富士山頂を目指す。台風並の暴風雨が上がり、ようやく山頂が晴れ上がったのは、滞在3日目の午後のことだ。

輝く新雪を目の当たりにした瞬間、無我夢中でルートも定かでない北側斜面を直登する。

絶えず吹く偏西風に飛ばされそうになりながら、午後3時、およそ3000メートル地点でタイムアウト。雪面にたどり着くことはできなかったが、心は充足感に満たされていた。

記録的な豪雨にもかかわらず、雨上がりの富士山の表面は嘘のように乾いている。五合目の御中道から奥庭にかけて、コケモモや地衣類に混り、ハクサンシャクナゲ、シラビソなどが溶岩上にしがみつくように生えている。(右)

富士山は比較的の山としての歴史が浅いため、他の山域の森林限界に普通に見られるハイマツが無く、代わりにカラマツを多く見ることができる。(左)強い偏西風の影響で樹高は低く、枝が一樣に東側を向いている。

晴れ上がった山肌を西日が照らし新雪を染める。(表紙)厳冬期の山頂付近の風は半端ではない。時に風速50メートルもの突風が吹くという。まもなく富士山は本格的な冬を迎えようとしている。



日本一の山を目指す 標高3776メートルの富士山はご存じ活火山だ。いつ噴火してもおかしくないという。遠目にはなだらかな山容が優美さを感じさせ、穏和な印象を受けるが、いざその懐に飛び込んでみると、それが甘い幻想に過ぎないと思知らされる。荒々しい山肌、いたるところに見られる寄生火山火口、幾層にも重なる火山砂礫と溶岩の断層、鬱蒼とした樹木に覆われた山腹など、恐ろしいほどのエネルギーに満ちている。

今回の富士山行には布石がある。今年の9月初めの週末、五合目吉田口より山頂に立った。生涯6度目の富士山頂だ。この時も午後から登り始め、山頂に着いたのは日没直後になってしまった。

急いで西側へ回り込み、夕暮れの山頂

周辺を撮影。足下まで闇が迫ったころ、なるべく風当たりの少ない場所を捜してツェルト(携帯テント型シート)を設営。取るものもとりあえず中にもぐり込んだ。一気に登ったため、高度順化がなされず軽い高山病となり、もうろうとしながらも酒をあおり、そのまま食事も摂らずに寝てしまった。

9月初めとはいえ、富士山頂の気温は低い。夜明け前には0度近くにまで下がり、秒速10メートルの風が吹けば、体感温度は楽にマイナスの世界だ。眼下には富士吉田から御殿場の街灯りが拡がり、その先には東京方面の夜景が光の海となって望まれる。天頂を覆う無数の星々と相まって、さながらトワイライトゾーンの様を呈している。下界ではこの明るさと暗さの同居はあり得ないな、と思い

つつシャッターを押す。

夏の富士山頂は賑やかだ。夜明け前から団体ツアーが押し寄せ、添乗員のハンドマイクの声が飛び交い、まるで京都でも来たようだ。やがてご来光ともなるとあちこちで黄色い声がかまする。そんな喧噪をよそにビバークサイトを後に下山に向かいながら、よし、次は雪のある時期に登ろう・・・その思いが今回の山行に至った。

絶えず西側から吹き続ける風速10メートルから20メートルの風。幾度も吹き倒されそうになりながらも、新雪に触れたい一心で高度を稼ぐ。風に当たり、露出した顔の右半分が麻痺し始めたころ、陽も西に傾き、タイムアウト。下山の潮時と判断。気温3度、体感温度は

マイナス10度近くにまでなるのだろうか。

結局雪面まで到達することはできなかったが、一般ルートから外れた北面のただっ広い尾根を標高3000メートル付近まで登ることで、山小屋の連なる吉田口登山道では味わうことのできない、純粋な山の気配と威力に向き合うことができたように思う。

まもなく富士山は厳冬期に入る。気温はマイナス20～30度にまで下がり、山稜を覆う雪はカチカチに凍りつき、想像を絶する烈風が吹き荒れるという。優れた登山技術と体力と気力があってこそ到達可能な真冬の富士山頂。自己の能力と相談しながらも、いつかは訪れてみたいものだ。

夏の富士山吉田口山頂、浅間神社奥宮付近から望む東京方面の夜景。天気がよいと東京湾から遙か千葉方面まで確認することができる。山頂を一周すると、相模湾から伊豆半島、駿河湾を経て東海方面、また北面からは眼前の南アルプスは当然のこと、中央アルプス、北アルプス、八ヶ岳連峰、秩父山地を大パノラマとして眺望することができる。



樹海を歩く 富士山北麓に広大な森林が展開する。青木ヶ原と呼ばれている地域だが、これは864年に噴火した長尾山(寄生火山)から流れ出した溶岩台地にできた森で、形成の年代から見ると、たいへん新しい森だといえる。

今回訪れたのは、この青木ヶ原の上部、富士山三合目付近の森だ。

この辺りの森が青木ヶ原と同時期にできあがったものなのか、あるいはもっと古い年代のものなのか、まだ未確認だが標高1800メートル余り、長尾山よりも4



00メートルほど上部に位置することから、おそらく青木ヶ原より古い年代に形成されたものかも知れない。

いずれにしても針葉樹を主体とした黒い森は前号で紹介した荒川源流の森とも共通したものがあるようだ。下木としてシャクナゲが覆うあたりも良く似ている。ただ、驚いたのは、こんな高所にまでアカマツが点在しているということ。もっと温暖な地域にあるものとばかり思っていたので、意外な気がするのだが。私の認識不足ということだろうか。

しかし、今残っているアカマツはどれも見事な成木ばかりで、次世代は育っていないようだ。その後進出してきたコマツガやシラビソなどに取って代わられ

ている。明るいところを好むアカマツにしてみれば、暗い林床で己の子孫を繁茂させることは難しいのだろう。

雨の中、森を歩くのは実に気持ちがいい。木々はどれも瑞々しく、地面を覆うコケ類はたつぷりと水を

吸い込んでふっくらとしている。できるだけダメージを与えないようにそっと歩く。一面のコケが生えるまでに、いったいどれほどの時間がかかるのだろうか。それを考えるとむやみに踏み込む

訳にはゆかない。けれど、森を歩く醍醐味はやはり苔むした中を自由に散策することだろう。要は当事者の心の有り様が大切だと思っている。謙虚さと思い切りの良さが必要なのだ。

大胆に、且つ繊細に。森を歩く極意のような気がする。

現代人には河原の石の上もうまく歩けない者が増えているという。普段当たり前すぎて考えもしないことだが、歩く行為、なかなか技術が必要なのだ。

もっともっと、森を自由にさまよいたいと思う。心身ともに・・・

一面コケに覆われた林床は上等な絨毯のようにふわふわしている。そんな森を歩いていると、太古の世界にタイムスリップしたような気持ちになってくる。

主に森を構成しているツガやシラビソなどに混ざってアカマツの老木も見られる。(下)樹下には球果(マツボックリ)がたくさん落ちていますが、陰性の森に若木は育っていない。

